

## まほうのじゅもん

千葉県 東松戸小学校 3年 横山 加奈

夕方のピアノの帰り道。母と電車に乗るため、船ばしえきへいそいで向かっていた。すると、わたしだけ、階だんをかけ下り電車に乗れてしまった。母は、階だんを下りるとき時間がかかったため、電車のドアがしまり、ドアにゆびをはさんでしまった。やっとゆびがぬけたとき、電車は走り出してしまった。電車のドアがしまってから発車するまで、たったの5びょうていどのできごとだった。

母はドアの外から、

「西船ばしでおりて！西船ばし！」

とさけんでいた。わたしはふあんでなきそうになってしまった。そのとき、近くにいたおばさんが母に、

「大じょうぶ。」

と身ぶり手ぶりでつたえてくれた。その後、わたしに、

「大じょうぶ？心ばいしなくてもいいからね。」

とやさしく声をかけてくれた。そのとき、わたしの心はさみしくて、母に会えるかというふあんで話す気にもなれなかった。

そして、さみしさが少しなくなってきたとき、やっと話す気になれた。おばさんは、「家はどこ？」としつ問してくれた。話しているとき、なきそうだったので、声がふるえてしまった。船ばしえきから西船ばしえきまでの時間がいつもよりとても長く感じた。まどの外のけしきは、目になみだがかうかんでいたから、ぼやけていた。

乗っている電車がやっと西船ばしについたとき、おばさんはいっしょに電車からおりてくれた。そして、母が次の電車で西船ばしえきにつくまで、待っていてくれた。母と会えたときに、おばさんが、

「会えてよかったね。」

と言ってくれた。母がおれいを言ったあと、おばさんは階だんを走ってのぼって行った。

わたしは、

(このおばさんは、本当は西船ばしえきでおりる予定ではなかったかもしれない。わたしがふあんで心ばいしてくれたから、ここでおりるふりをしてくれて、母と会えるまで待っていてくれたのかな？)

と、心の中で思った。そして、母が気をつかわなくてもいいように、階だんを上がっていつてくれた。とてもやさしい人だと思った。

このおばさんはあの短い時間で、わたしと母の両方をたすけてくれた。しかもやさしい声とえがおで、わたしのふあんが少しでもなくなるように、気をつけてくれた。今度はわたしが、おばあさんやこまっている人の荷物をさりげなく持ってあげたり、せきをゆずったりして、少しでも役に立ちたいと思った。

おばさんには心から感しゃしていたのに、そのときは、大きな声で「ありがとうございます」と言うことができなかったことが、ざんねんだった。これからは親切にしてもらった人や友だちに、「ありがとう」と心をこめて言える人になりたいと思う。

母は「おはようございます」のあいさつは、一日を気持ちよくすごすための「まほうのじゅもん」だとよく言っている。いつでも「ありがとう」が言えるようになるためにも、毎日のあいさつを大切にしていきたいと思う。